D 180

高齢者の生活動作能力と寝衣の関係に関する－考察（第１報）

和洋女子大家政　○力丸テル子　佐久間　淳（非常勤）

目的　本研究は、わが国における人口高齢化に際し、老人が健康でより快適な生活を得るため、とくに身近な寝衣について、老人の健康状態や生活動作能力との関係から実態を把握し、快適で使用性と扱いにすぐれたものを考案する基礎分析の第一報である。

方法　まず寝衣などの実態調査を、1988年から89年にかけて養護老人ホーム入所老人30名と、65歳以上の在宅老人70名について行った。内容は現在の生活動作能力、夏冬衣服、寝衣の種類と材質、使用の理由、使用上での問題点などの30問である。この結果をコンピュータにかけ、クロス集計、相関分析、多変量解析などを行った。

結果と考察　最終的分析に用いたのは、ホーム老人の27名（男６＝22.2％、女21＝77.8％）在宅老人の53名（男13＝24.5％、女40＝75.5％）、計80名であり、平均年齢では76.4歳と76.8歳で近似していた（階層別には差がある）。そこで、生活動作（ＡＤＬ）の状況をみると、①とてもよい、②よい、③普通、④悪い、⑤とても悪い、の内で①～③を合わせたものは前者が70.3％、後者が66.0％であり、在宅老人のほうが悪い傾向を示した。また趣味による活動でもホーム老人の活発性が見られた。

一方、普段着の種別を見ると、前者では和服が１割強を占め、後者では洋服が93％と若干多かった。そして流行への関心は、「ある」が前者の19％に対し、後者では34％に及び特徴的な差を示した。ついで寝衣は、前者で日本式ねまきが56％であり、後者では48％と少なく、代わりにパジャマが52％を占めた。そして着用上での問題点としては、サイズが合わないが前者で26％、後者で15％に達しており、改善の必要性が考えられた。